

# 雁の童子

宮沢賢治

青空文庫



流沙るさの南やなぎの、楊かこで囲こまれた小さな泉いずみで、私は、いった麦粉むぎこを水  
 にといて、昼しよくじの食じ事くじをしておりました。

そのとき、一人の巡じゆんれい礼れいのおじいさんが、やつぱり食じ事くじのた  
 めに、そこへやつて来きました。私わたしたちはだまつて軽かるく礼れいをしまし  
 た。

けれども、半日はんじつまるつきり人ひとにも出で会あわないそんな旅たびでしたか  
 ら、私わたしは食じ事くじがすんでも、すぐすぐに泉いずみととその年とし老とつた巡じゆんれい礼れいとから、  
 別わかれてしままいたくはありませせんでした。

私わたしはしばらくその老ろうじん人じんの、高たかい咽のど喉ぼとけ仏ぶつのぎくぎく動うごくのを、  
 見みるともなしに見みていまいました。何なにか話わし掛かけたいと思おもいましたが、

どうもあんまり向うが寂かなので、私は少しきゆうくつにも思いました。

けれども、ふと私は泉のうしろに、小さな祠のあるのを見付けました。それは大へん小さくて、地理学者や探険家ならばちよつと標本ひょうほんに持つて行けそうなものではありませんでしたがまだ全くあたらしく黄いろと赤のペンキさえ塗られていかにも異様に思われ、その前には、粗末ながら一本の幡も立っていました。

私は老人が、もう食事おわも終りそうなのを見てたずねました。「失礼ですがあのお堂はどなたをおまつりしたのでですか。」

その老人も、たしかに何か、私に話しかけたくていたのです。だまって二、三度うなずきながら、そのたべものをのみ下して、

低くひく言いました。

「……童子どうじのです。」

「童子どうじつてどう云いう方かたですか。」

「雁かりの童子と仰おつしやるのは。」老人は食器しょつきをしまい、屈かがんで泉いずみの水をすくい、きれいに口をそそいでからまた云いいました。

「雁の童子と仰おつしやるのは、まるでこの頃ごろあつた昔むかしはなしのようなのです。この地方にこのごろ降おりられました天童子てんどうじだといふのです。このお堂はこのごろ流沙るさの向むこう側がわにも、あちこち建たつております。」

「天のこどもが、降りたのですか。罪つみがあつて天から流ながされたのですか。」

「さあ、よくわかりませんが、よくこの辺へんでそう申もうします。多分  
そうでございましょう。」

「いかがでしょう、聞かせて下さいませんか。お急いそぎでさえなかつたら。」

「いいえ、急きぎはいたしません。私の聴きいただけお話ししましたよ。」

沙車さしやに、須利耶圭すりやけいという人がございました。名門めいもんではござい  
ましたそうですが、おちぶれて奥おくさまと二人、ご自分は昔むかしからの  
写経しゃきょうをなさり、奥おくさまは機はたを織おつて、しずかにくらしてい  
れました。

ある明方あけがた、須利耶さまが鉄砲てつぱうをもったご自分の徒弟いとこのかた

とご一緒いっしょに、野原を歩いていられました。地面じめんはごく麗うるわしい青い石で、空がぼうつと白く見え、雪もま近ちかでございました。

須利耶さまがお従弟さまに仰おつしやるには、お前もさような慰なぐさみの殺せつしょう生しょうを、もういい加減かげんやめたらどうだと、斯こうでございました。

ところが従弟の方が、まるですげなく、やめられないと、ご返へ事んじです。

（お前はずいぶんむごいやつだ、お前の傷いためたり殺ころしたりするものが、一体どんなものだかわかっているか、どんなものでもいちは悲かなしいものなのだぞ。）と、須利耶さまは重かさねておさとしになりました。

（そうかもしれないよ。けれどもそうでないかもしれない。そうだとすればおれは一層おもしろいのだ、まあそんな下らない話はやめろ、そんなことは昔の坊主どもの言うこった、見ろ、向うを雁かりが行くだろう、おれは仕止しとめて見せる。）と従弟のかたは鉄砲つぽうを構かまえて、走つて見えなくなりました。

須利すりや耶やさまは、その大きな黒い雁の列れつを、じつと眺ながめて立たれました。

そのとき俄にわかに向むこうから、黒い尖とがった弾丸だんがんが昇のぼつて、まつ先の雁の胸むねを射いました。

雁は二、三べん揺ゆらぎました。見る見るからだに火が燃もえ出し、世よにも悲かなしく叫さけびながら、落おちて参まいつたのでございます。



弾丸がまた昇つて次の雁の胸をつらぬきました。それでもどの雁も、遁げはいたしませんでした。

却つて泣き叫びながらも、落ちて来る雁に随いました。

第三の弾丸が昇り、

第四の弾丸がまた昇りました。

六発の弾丸が六足の雁を傷つけまして、一ばんしまいの小さな一足だけが、傷つかずに残っていたのでございます。燃え叫ぶ六足は、悶えながら空を沈み、しまいの一足は泣いて随い、それでも雁の正しい列は、決して乱れはいたしません。

そのとき須利耶さまの愕ろきには、いつか雁がみな空を飛ぶ人の形に変わつておりました。

赤い焰ほのおに包まれて、歎なげき叫んで手足をもだえ、落ちて参る五人、それからしまいに只一人、完まったいものは可愛らしい天の子供ことでございました。

そして須利耶すりやさまは、たしかにその子供に見覚えみおぼがございました。最初さいしよのものは、もはや地面じめんに達たつします。それは白い鬚ひげの老人ろうじんで、倒たおれて燃もえながら、骨立ほねだった両手りょうてを合せ、須利耶すりやさまを拜おがむようにして、切なく叫びますのには、

（須利耶すりやさま、須利耶すりやさま、おねがいでございます。どうか私の孫まごをお連れ下さいませ。）

もちろん須利耶すりやさまは、馳はせ寄よつて申もうされました。（いいとも、いいとも、確たしかにおれが引とき取とつてやろう。しかし一体お前まへらは、

どうしたのだ。―そのとき次々に雁が地面に落ちて来て燃えま  
した。大人もあれば美しい瓔珞をかけた女子もございました。  
その女子はまつかな焔に燃えながら、手をあのおしまいの子にの  
ばし、子供は泣いてそのまわりをはせめぐつたと申します。雁  
の老人が重ねて申しますには、

（私共は天の眷属でございます。罪があつてただいままで雁の  
形を受けておりました。只今報いを果しました。私共は天に帰  
ります。ただ私の一人の孫はまだ帰れません。これはあなたとは  
縁のあるものでございます。どうぞあなたの子にしてお育てを願  
います。おねがいでございます。―と斯うでございます。

須利耶さまが申されました。

(いいとも。すつかり判わかった。引き受けた。安心あんしんしてくれ。)

すると老人は手を擦こすつて地面に頭を垂たれたと思うと、もう燃えつきて、影かげもかたちもございませんでした。須利耶さまも従弟いとこさまも鉄砲てつぽうをもつたままぼんやりと立っていられました。それでいったい二人いっしよに夢ゆめを見たのかとも思われました。ところがあとで従弟さまの申されますにはその鉄砲はまだ熱あつく弾丸だんがんは減へつておりそのみんなのひざまずいた所ところの草はたしかに倒たおれておつた。それでございます。

そしてもちろんそこにはその童子どうじが立っていられました。須利耶さまはわれにかえつて童子どうじに向むかつて云いわれました。

(お前は今日きょうからおれの子供だ。もう泣かないでいい。お前の前

のお母さんかあや兄さんたちは、立派りつぱな国のほに昇のぼつて行かれた。さあおいで。）

須利耶さまはごじぶんのうちへ戻もどられました。途中とちゆうの野原は青い石でしんとして子供は泣きながら随ついて参まいりました。

須利耶さまは奥おくさまとご相談そうだんで、何と名前をつけようか、三、四日お考えでございましたが、そのうち、話はもう沙車さしゃ全体ぜんたいにひろがり、みんなは子供を雁の童子と呼よびましたので、須利耶さまも仕方しかたなくそう呼んでおいででございました。」

老人ろうじんはちよつと息いきを切りました。私は足もとの小さな苔こけを見ながら、この怪あやしい空あやから落おちて赤い焰ほのおにつつまれ、かなしく燃もえて行く人たちの姿すがたを、はつきりと思うい浮うかべました。老人はしば

らく私を見ていましたが、また語りつづけました。

「沙車さしやの春おわの終りには、野原いちめん楊やなぎの花が光つて飛びます。

遠くこおりの氷の山からは、白い何とも云いえず瞳ひとみを痛いたくするような光が、

日光の中を這はつてまいります。それから果樹かじゆがちらちらゆすれ、

ひばりはそらですきとおった波なみをたてます。童子どうじは早くも六つ

になられました。春のある夕方のこと、須利耶すりやさまは雁かりから来た

お子さまをつれて、町を通つて参まいられました。葡萄ぶどういろの重おもい雲

の下を、影法師かげぼうしの蝙蝠こうもりがひらひらと飛んで過すぎました。

子供らが長い棒ぼうに紐ひもをつけて、それを追おいました。

(雁の童子だ。雁の童子だ。)

子供らは棒ぼうを棄すて手をつなぎ合つて大きな環わになり須利耶さま

親子を囲かこみました。

須利耶さまは笑わらつておいででございました。

子供らは声を揃そろえていつものようにはやします。

（雁の子、雁の子雁童子、

空から須利耶におりて来た。）と斯こうでございます。けれ

ども一人の子供が冗じょうだん談もに申もうしますには、

（雁のすてご、雁のすてご、

春になつてもまだ居いるか。）

みんなはどつと笑わらいましてそれからどう云うわけか小さな石が  
一つ飛とんで来て童子どうじの頬ほおを打うちました。須利耶すりやさまは童子をかば

つてみんなに申まをされますのには、

おまえたちは何をするんだ、この子供は何か悪いことをしたか、冗談にも石を投げるなんていけないぞ。

子供らが叫んでばらばら走って来て童子に詫びたり慰めたりいたしました。或る子は前掛けの衣囊から干した無花果を出して遣ろうといたしました。

童子は初めからお了いまでにごにこにこ笑っておられました。須利耶さまもお笑いになりみんなを赦して童子を連れて其処をはなれなさいました。

そして浅黄の瑪瑙の、しずかな夕もやの中でいわれました。

(よくお前はさつき泣かなかつたな。) その時童子はお父さまにすがりながら、



（お父さんわたしの前のおじいさんはね、からだに弾丸をからだに七つ持っていたよ。）と斯う申されたと伝えます。」

巡礼の老人は私の顔を見ました。

私もじつと老人のうるんだ眼を見あげておりました。老人はまた語りつづけました。

「また或る晩のこと童子は寝付けないでいつまでも床の上でもがきなさいました。（おつかさんねむられないよう。）と仰つしやりまする、須利耶の奥さまは立つて行って静かに頭を撫でておやりなさいました。童子さまの脳はもうすっかり疲れて、白い網のようになつて、ぶるぶるゆれ、その中に赤い大きな三日月が浮かんだり、そのへん一杯にぜんまいの芽のようなものが見えたり、

また四角な変へんに柔やわらかな白いものが、だんだん拡ひろがって恐おそろしい大きな箱はこになつたりするのでございました。母さまはその額ひたいが余あまり熱あついといつて心配しんぱいなさいました。須利耶さまは写うつしかけの経きようもん  
文ぶんに、掌てを合せて立ちあがられ、それから童子さまを立たせて、紅革べにがわの帯おびを結むすんでやり表おもてへ連れてお出でになりました。駅えきのどの家うちももう戸しを閉めてしまつて、一いち面めんの星ほしの下したに、棟むね々むねが黒くろく列ならびました。その時童子はふと水みづの流ながれる音を聞きかれました。そしてしばらく考えてから、

（お父さん、水は夜でも流れるのですか。）とお尋たずねです。須利耶さまは沙漠さばくの向むかうから昇のぼつて来た大きな青い星ほしを眺ながめながらお答えなされます。

（水は夜でも流れるよ。水は夜でも昼でも、平らな所でさえなかつたら、いつまでもいつまでも流れるのだ。）

童子の脳は急にすっかり静まって、そして今度は早く母さまの処にお帰りなりとうなりまする。

（お父さん。もう帰ろうよ。）と申されながら須利耶さまの袂を引つ張りなさいます。お二人は家に入り、母さまが迎えなされて戸の環を嵌めておられますうちに、童子はいつかご自分の床に登って、着換えもせずにくっすり眠ってしまわれました。

また次のようなことも申します。

ある日須利耶さまは童子と食卓にお座りなさいました。食品の中に、蜜で煮た二つの鮎がございました。須利耶の奥さまは、

一つを須利耶さまの前に置かれ、一つを童子にお与えなされました。

（喰べたくないよおつかさん。）童子が申されました。（おいしいのだよ。どれ、箸をお貸し。）

須利耶の奥さまは童子の箸をとつて、魚を小さく砕きながら、（さあおあがり、おいしいよ。）と勧められます。童子は母さまの魚を砕く間、じつとその横顔を見ていられましたが、俄かに胸が変な工合に迫つてきて気の毒なような悲しいような何とも堪らなくなりました。くるつと立つて鉄砲玉のように外へ走つて出られました。そしてまつ白な雲の一杯に充ちた空に向つて、大きな声で泣き出しました。まあどうしたのでしょうか、と須利耶

の奥さまが愕おどろかれます。どうしたのだろう行ってみろ、と須利耶さまも気づかわれます。そこで須利耶すりやの奥さまは戸口にお立ちになりましたら童子はもう泣きやんで笑わらつていられましたとそんなことも申し伝つたえます。

またある時、須利耶さまは童子をつれて、馬市うまいちの中を通られましたら、一疋びきの仔馬こうまが乳ちちを呑んでおつたと申します。黒あらくい粗ぬ布のを着きた馬商うましようにん人が来て、仔馬を引きはなしもう一疋の仔馬のに結むすびつけ、そして黙だまつてそれを引いて行こうと致いたします。母親の馬はびつくりして高く鳴きました。なれども仔馬はぐんぐん連つれて行かれます。向うの角かどを曲まがろうとして、仔馬は急いそいで後あ肢とあしを一方あげて、腹はらの蠅はえを叩たたきました。

童子は母馬の茶いろな瞳を、ちらつと横眼で見られましたが、俄かに須利耶さまにすがりついて泣き出されました。けれども須利耶さまはお叱りなさいませんでした。ご自分の袖で童子の頭をつつむようにして、馬市を通りすぎてから河岸の青い草の上かわぎしに童子を座すわらせて杏あんずの実みを出しておやりになりながら、しずかにおたずねなさいました。

（お前はさつきどうして泣いたの。）

（だってお父さん。みんなが仔馬をむりに連れて行くんだもの。）

（馬は仕方ない。もう大きくなつたからこれから独りで働らくんだ。）

（あの馬はまだ乳を呑んでいたよ。）

（それはそばに置いてはいつまでも甘えるから仕方ない。）

（だつてお父さん。みんながあのお母さんの馬にも子供の馬にもあとで荷物をもつ一杯つけてひどい山を連れて行くんだ。それから食べ物なくなると殺して食べてしまふだろう。）

須利耶さまは何気ないふうで、そんな成人のようなことを云うもんじやないとは仰つしやいましたが、本統は少しその天の子供が恐ろしくもお思いでしたと、まあそう申し伝えます。

須利耶さまは童子を十二のとき、少し離れた首都のある外道の塾にお入れなさいました。

童子の母さまは、一生けん命機を織つて、塾料や小遣いやらを拵らえてお送りなさいました。

冬が近くて、天山はもうまつ白になり、桑の葉が黄いろに枯れてカサカサ落ちました頃、ある日のこと、童子が俄かに帰っておいでです。母さまが窓から目敏く見付けて出て行かれました。

須利耶さまは知らないふりで写経を続けておいでです。

(まあお前は今ごろどうしたのです。)

(私、もうお母さんと一緒に働らこうと思います。勉強し

ている暇はないんです。)

母さまは、須利耶さまのほうに気兼ねしながら申されました。

(お前はまたそんなおとなのようなことを云って、仕方ないではありませんか。早く帰って勉強して、立派になつて、みんなの為にならないとなりません。)



（だつておつかさん。おつかさんの手はそんなにガサガサしているのでしょう。それなのに私の手はこんななんでしょう。）

（そんなことをお前が云わなくてもいいのです。誰だれでも年を老とれば手は荒あれます。そんなことより、早く帰つて勉強をなさい。お前の立派になることばかり私には楽たのみなんだから。お父さんがお聞きになると叱しかられますよ。ね。さあ、おいで。）と斯こう申されます。

童子どうじはしよんぼり庭にわから出られました。それでも、また立ち停どまつてしまわれましたので、母さまも出て行かれてもつと向むうまでお連つれになりました。そこは沼地ぬまちでございました。母さまは戻もどろうとしてまた（さあ、おいで早く。）と仰おつしやつたのでしたが

童子はやつぱり停とまったまま、家の方をぼんやり見ておられますので、母さまも仕方なくまた振り返かえつて、蘆あしを一本抜ぬいて小さな笛ふえをつくり、それをお持もたせになりました。

童子どうじはやつと歩き出でされました。そして、遥はるかに冷つめたい縞しまをつくる雲のこちらに、蘆あしがそよいで、やがて童子の姿すがたが、小さく小さくなつてしまわれました。俄にわかに空を羽音はねねがして、雁かりのいちれつ列れつが通とりました時、須利耶すりやさまは窓まどからそれを見て、思わずどきつとなされました。

そうして冬に入いりましたのでございます。その厳きびしい冬が過すぎますと、まず楊やなぎの芽めが温和おとなしく光あり、沙さ漠ばくには砂糖さとうみず水みずのような陽かげろう炎えんが徘徊はいかいいたします。杏あんずやすももの白い花はなが咲さき、次ついでで

は木立も草地もまつ青になり、もはや玉髓の雲の峯が、四方の空を繞る頃となりました。

ちようどそのころ沙車の町はずれの砂の中から、古い沙車大寺のあとが掘り出されたとのことでございました。一つの壁がまだそのままで見附けられ、そこには三人の天童子が描かれ、ことにその一人はまるで生きたようだとみんなが評判しました。その匠を訪ねて色々礼を述べ、また三巻の粗布を贈り、それから半日、童子を連れて歩きたいと申されました。

お二人は雑沓の通りを過ぎて行かれました。

須利耶さまが歩きながら、何気なく云われすには、

(どうだ、今日きょうの空あおの碧あおいことは、お前まへがたの年としは、丁度ちやうど今いまあのそらへ飛とびあがろうとして羽はねをばたばた云いわせているようなものだ。)

童子どうじが大おほへんに沈しずんで答こたえられました。

(お父ちちさん。私わたしはお父ちちさんとはなれてどこへも行いきたくありません。)

須利耶すりやさまはお笑わらいになりました。

(勿もちろん論ろんだ。この人の大おほきな旅たびでは、自分おれだけひとり遠とほい光ひかりの空そらへ飛とび去さることはいけなのだ。)

(いいえ、お父ちちさん。私わたしはどこへも行いきたくありません。そして誰だれもどこへも行いかないでいいのでしょうか。)

とこう云いう不思議ふしぎ

なお尋ねでございます。

（誰もどこへも行かないでいいかってどう云うことだ。）

（誰もね、ひとりで離れてどこへも行かないでいいのでしようか。）

（うん。それは行かないでいいだろう。）と須利耶さまは何の気もなくぼんやりと斯うお答えでした。

そしてお二人は町の広場を通り抜けて、だんだん郊外に來られました。沙がずっとひろがっておりまして。その砂がところ深く掘られて、沢山の人がある中に立つてございました。お二人も下りて行かれたのです。そこに古い一つの壁がありました。色はあせてはいましたが、三人の天の童子たちがかいてございま

した。須利耶さまは思わずどきつとなりました。何か大きい重いものが、遠くの空からぱたりかぶさったように思われましたのです。それでも何気なく申されますには、

(なるほど立派なもんだ。あまりよく出来てなんだか怖いようだ。この天童はどこかお前に肖ているよ。)

須利耶さまは童子をふりかえりました。そしたら童子はなんだからわらったまま、倒れかかっていたられました。須利耶さまは愕ろいて急いで抱き留められました。童子はお父さんの腕の中で夢のようにつぶやかれました。

(おじいさんがお迎えをよこしたのです。)  
須利耶さまは急いで叫ばれました。

（お前どうしたのだ。どこへも行つてはいけないよ。）

童子が微かに云われました。

（お父さん。お許し下さい。私はあなたの子です。この壁は前にお父さんが書いたのです。そのとき私は王の……だったのですがこの絵ができてから王さまは殺されたくしどもはいつしよに出家したのでした。敵王がきて寺を焼くとき二日ほど俗服を着てかくれているうちわたくしは恋人人があつてこのまま出家にかえるのをやめようかと思つたのです。）

人々が集つて口々に叫びました。

（雁の童子だ。雁の童子だ。）

童子はも一度、少し唇をうごかして、何かつぶやいたようでご

ございましたが、須利耶さまはもうそれをお聞きとりなさらなかつたと申します。

私の知っておりますのはただこれだけでございます。」

老人はもう行かなければならないようでした。私はほんとうに名残り惜しく思い、まつすぐに立つて合掌して申しました。

「尊いお物語をありがとうございます。まことにお互い、ちよつと沙漠のへりの泉で、お眼にかかつて、ただ一時を、一

緒に過ぎただけではございますが、これもかりそめのことではないと存じます。ほんの通りかかりの二人の旅人とは見えませんが、実はお互がどんなものかもよくわからないのでございます。いずれはもろともに、善逝の示された光の道を進み、かの無上



菩提ぼだいに至るいたことでごごいます。それではお別れわかいたします。さ  
ようなら。」

老人は、黙だまって礼れいを返かえしました。何か云いいたいようでしたが黙  
って俄にわかに向むくを向むき、今まで私の来た方の荒地あれちにとぼとぼ歩き  
出でしました。私もまた、丁度ちやうどその反はん対たいの方かたの、さびしい石原  
を合掌したまま進すすみました。



# 青空文庫情報

底本：「インドラの網」角川文庫、角川書店

1996（平成8）年6月20日再版

底本の親本：「新校本 宮澤賢治全集」筑摩書房

1995（平成7）年5月発行

入力：浜野智

校正：浜野智

1999年7月26日公開

2007年8月3日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 雁の童子

宮沢賢治

2020年 7月13日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>